

## 中国問題へのアプローチ

\*

中国問題は、古い歴史の考証をまつまでもなく、朝鮮問題と同様、つねに日本外交にとって出発点であるとともに、終着点でもあった。また、それは日本外交に栄光をもたらすものであったよりは、むしろ汚点を残すことの方が多かったようである。特にこの百年間のそれは、重大な失点ばかりを重ねてきた歴史だったといえよう。

さらに中国問題については、国内における論議が尖鋭に分裂し、国民的なコンセンサスを求めることが容易ではなかった。このため中国問題は、外交問題でありながら、同時にそのまま、深刻な国内問題に直結する宿命を帯びていたように思われてならない。

したがって中国問題は、歴代の日本政府にとつて、いわば「鬼門」の一つであつて、下手に手を出そうものなら火傷を免れそうもない。といつて、全然手を出さないでいると、内外どこからか圧力が出てきて、これを回避することは容易でない。一方、それは野心的な政治家にとつては、抑え難い誘惑を覚える性質の問題でもあつたらしく、多くの政治家がこの問題に挑み、そして多かれ少なかれ傷ついてきたのが、日中関係の歴史だったのである。

\* \*

日本と中国とは、近いようで遠い国である。それは「大晦日」と「元旦」の関係にもたとえられるであらうか。

なるほど、共通の表意文字を持つてはいるが、日本語と中国語の構造は全く違つ。お互いに皮膚の色は黄色で、髪の毛は黒いが、住居や衣服、風俗、習慣、さらには食生活にいたるまで、大きく相違している。違つているのは、目に見えるものばかりではない。宗教や文学、政治や経済、制度や教育等も違つている。つまり、文化の捉え方や考え方、さらには人間の生き方万般に対す、対処の仕方が非常に違つているのである。

例えば日本は、いちはやく「近代化」の名において、貪欲に西洋化の道を急いだ。中国人は、そのような貪欲な西洋化を潔しとしなかった。日本人は、自らの伝承を捨てるのに大きい躊躇を感じなかったが、中国人は、自らのそれを一向に捨てようとはしなかった。日本人は物事を短い時間帯で考え、その功罪を明らかにしようとしたが、中国人は、もっと永い時間帯において考えたり、評価したりしてきた。それどころか、中国人というのはもともと、時間というものを考えているのかどうかさえ、判別し難いように思われるところさえあった。

日本人は、桜の花のようにパツと咲き、パツと散ることを美しいと思ひ、潔しとも考えた。しかし中国人は、パツと咲いたり散ったりすることに、別段感動するようには思えない。そのように、数えあげてみれば限りはなく、日中の間に共通点を探することは難しいが、相違点を掘出しにかかると際限がないように思われる。

男と女は同じ人間でありながら、物事に対する考え方や処理の仕方が違い、感情の波長や構造も違う。それでいて、夫婦という形で、抜き差しならない共同生活をしなければならぬ。だから夫婦生活は、夫婦がそれぞれ、よほどお互いに努力しない限り、うまく運ばないものである。日本と中国とのつき合いにも、同じような消息がうかがえるのではないだろうか。日中兩國は、古くから一衣帯水の隣国であり、未来永劫にそうである。好むと好まざるとに拘らず、相互に分

別をもって、平和なつき合いをしなければならぬ間柄である。ところが、日中兩國の間には共通点よりは相違点が多く、相互の理解は想像以上に難しい。しかし、お互いに隣国として永久につき合わなければならぬ以上、よほどの努力と忍耐が双方に求められるのは当然である。

\*\*\*

国と国とのつき合いには、当然ルールというものが要る。マナーというものも要る。あたかもゲームにルールと、フェアプレイの精神が必要であり、それらを守ることによって初めてゲームが成り立つように、国と国とのつき合いにも、ルールとマナーがなければ成り立たないものである。国際法とか国際慣行とかいうものが生まれたのも、そうしたことが必要であり、また、それを支え尊重しようとする精神があつたからに違いない。そして、その基本には、相互に主権の尊重、約束の誠実な履行、平和と互恵と共存を求める精神がなければならぬ。

日中兩國の間柄もそのようなものとして、このルールと精神はお互いに大切にしなければならぬものである。その軌道から外れると兩國の関係は壊れ、この軌道の上を歩いている限り、兩國の関係は維持されていくのである。そのいずれかが驕慢であるときは、兩國の関係はうまくい

かなかつた。そのいずれかが相手に対する理解と尊敬の念を失つたときは、兩國の關係は、かならずといつてもいい程まずかつたのである。

\*\*\*

これまで述べたところは、外交ないしは日中關係の一般論である。日中間には、もう一つ第二次世界戦争が生み落した特殊な問題があつた。それは、中国には事実上二つの政府があつて、それぞれが、その正統性を主張することになつたことである。そして、この問題は、今日に至るもまだ完全には解決されていない。そのことは勿論、日中關係の処理に大きく投影して、その影は現在においてもなお完全には消えていないのである。われわれは、この問題につき一つの決断をしない限り、中国問題に取り組むことはできない。

私は、中国は二つあるという見解はとらない。何となれば、北京も台北も、二つの中国という見解をかたくなに退けている。争われているのは、二つの政府のうちいずれが一つの中国を代表するか、ということであると思つからである。

私は長い間、中国自身がこの問題につき何らかの決着をつけることを期待してきた。二つの政

府が納得づくで、その中の一つの正統性を認めることを期待したわけだが、不幸にしてそれはまだ実現していない。それでは双方と平等におつき合いをしようかと考えても、それは現実にはできない相談ではない。政権というものは、いつでも、またどこでも最も嫉妬深い存在であるからだ。

そこで私は、何らかの権威ある国際機関が、中国を代表する資格のある政府はそのいずれであるかを決めるのを待つて、わが国としての取るべき措置を考えるのもやむを得ない、と考えていたのである。だから私は池田内閣の外相時代に、国会における野党の質問に対し、そういう趣旨の答弁をした経緯がある。事実、そのころ中国代表権問題は、長い間国連の問題になっており、一時は棚上げ状態に置かれた時期もあったが、その後とみに活気を取りもどし、緊迫した重要問題になっていたからであった。そして、一九七一年秋の国連総会で、この代表権問題が、遂に劇的な解決をみるに至った。この国連の決定が、日中国交正常化の前進を促進する大きい契機になったことは否めないし、また私自身も、このとき日中正常化の問題に本格的に取り組む時機が、ようやく熟したと判断したのである。

\*\*\*

田中内閣は、昭和四十七年七月に成立し、私は外務大臣として入閣することになった。入閣早  
私は、日中国交正常化の機は熟したものと決断し、その準備に取りかかった。そこでまず、こ  
の問題の解決が日米関係を損ねるようなことがあってはならないので、米国側の理解と、できれ  
ばその祝福を取りつけねばならないと考えた。私の外交努力は、まずそのための対米折衝から始  
まったのである。

田中首相とニクソン大統領とのトップ会談は、四十七年八月三十一日、ハワイで行なわれた。  
この会談で田中内閣は、日米安保条約の堅持を米国に約束した。堅持という以上は、文字どおり  
堅持することで、小骨一本も抜くことをしないと約束である。米国側は勿論、新内閣のこの  
約束を多とした。さらに日本側は、成るか成らないかは判らないが、日中国交の正常化のため、  
近く交渉に入る意向であることを米国側に伝えた。米国側からは、何の躊躇もなく、「成功を祈る」  
という返事を得た。

問題は、北京がこの日米間の対話をどう受け取るかにかかっていた。私は、北京側の反応を慎  
重に見守っていたが、「日本の内閣総理大臣を北京空港に迎える用意がある」という中国側の意

向は、ハワイ会談後においても変化がないことを確かめた。しかし、日米安保条約をそのままにしておいて、日中関係の正常化が、すらすらとできるという確信はまだ持てなかった。何となれば、北京にとっては、日米安保体制は本来無縁であるばかりでなく、かつては中国にとって、敵性的な性質のものであったから、全部ではないまでも、部分的な改定を求めてきはしないかという懸念があつたからである。しかし、言うまでもなく日米安保条約については、たとえ部分的な改定であっても、それは最大の外交問題に発展する可能性があるばかりではなく、深刻な国内の政治問題にもなるおそれがあつたのである。

だが、思案だけからは、問題の打開はできるものではない。何らかの冒険が求められているのである。成るか成らないか、それは判らないが、まず試してみる必要がある。そのためには、首相が北京を訪問する決意をすることが、この問題打開のきめ手になるのだ。もとより、田中首相の胸中にも、こもこもの思いが走馬灯のように去来していたと見えて、なかなか決断するには至らなかった。田中さんといえども、やはり人の子であつた。しかし、いつまでも遷延すべきでない判断した田中さんは、「どうせお互いに生身の人間で、何時どこでどうなるか判つたものではない。行くことにしよう」と言つて、遂に決意してくれた。かくて同年九月下旬の、歴史的な田中訪中は実現することになったのである。